陸前地方の天然スレート建築

第5回

登米スレートの登場と大正昭和の普及

大沼正寛 | 東北工業大学 教授
阿部 正 | ノーマルデザインアソシエイツ 主宰

左：大沼正寛、右：阿部 正

これまで、スレート建築論の焦点を石巻雄勝に置いてきた。しかし、陸前地方に現存する民家を論じるのであれば、もう一つの焦点・登米をみる必要がある。当地方のあちこちで目にするスレート屋根は、登米産のほうが圧倒的に多いからである。

宮城県の北東部に位置する登米市登米町は、中央を北上川が南流し、古くから重要拠点の一つであった。その右岸（西側）は、平野が広がり、小高い丘もある。江戸時代は、丘に築かれた中世の遺構を利用して、仙台藩の軍事・経済拠点である「要害」が置かれた。明治に入り、廃藩置県の折、短期間ながら水澤縣庁（1872初–1874前期、註1）が置かれたことからも、その中核的位置が伺われる［図1、文献1・2、註2］。

明治期の近代建築も多数残るが、とくに有名なのは、重要文化財・旧登米高等尋常小学校であろう［写真1］。明治6（1873）年のウィーン万博で日本建築の造営にあたった山添喜三郎が、宮城県技手として腕を振るった擬洋風建築である［文献3、註3］。山添の設計に応えたのは、地元の大工・三島秀之助と佐藤朝吉である。2018年には、佐藤朝吉とその門下の大工らが続く時代で手がけた商家「海老喜」の計8棟が、スレート葺きの旧店舗を含め、登録文化財となった［写真2、註4］。こうして近世城下町の骨格上に明治以降の建造物が並ぶこの地区は、「宮城の明治村」と呼ばれている。

これに対し、北上山地に連なる左岸（東側）は、日根牛地区と呼ばれ、古くは産金で栄えたこともあると伝わるが、近代前期までは中山間の沢沿いに小さな集落が点在する領域であった［図2］。だが北沢集落を中心に、良質な天然スレートを産する岩脈「登米層（第2回にて紹介）」が眠っていることが判明するや、産業村へと変貌していく。大正・昭和、約80年の開発・普及史と、前史10年・閉山後20年をあわせて約110年。その栄枯盛衰の歩みと民家建築への広がりをたどってみよう。

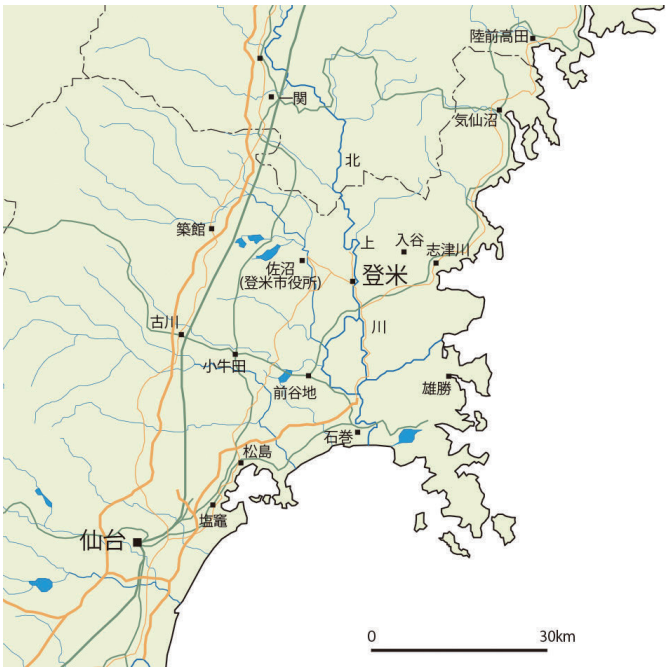

図1　宮城県北東部・北上川の流路と登米市登米町の位置

図2　登米町の範囲およびスレート採掘地の位置

写真1　登米高等尋常小学校（重文）

写真2　海老喜旧店舗（国登録）

写真3　高橋哲郎氏（2017年9月）

写真4　坑道堀の例（登米町S家）[註6]

写真5　東北天然スレート工業跡

写真6　公立登米病院（絵葉書）[註6]

写真7　旧竹田宮邸外観

写真8　スレート未利用材が遺る

高橋哲郎「登米スレートの採掘と施工」に学ぶ

登米町には、御年96歳になる屋根工事職人の高橋哲郎さんがおられる[写真3]。東京駅の平成大改修は、屋根からみれば第4世代に相当するが、高橋哲郎さんが手がけたのは戦後すぐ、第2世代の屋根である（昭和27（1952）年、註5）。当時の施工は、師の高橋勉治（べんじ）ら50代のベテラン3人と、同行した29歳の高橋哲郎さんら働き盛り6人。高橋哲郎さんはその後、90歳近くまで現役だった。その記憶を綴った掲題の書[文献4]から、要所をつむぎ合わせてみよう。

まずは「採掘」編から。明治10年代に開発が本格化し、20年代には商品化されていた雄勝の石盤・スレート。これと同質の岩体を再発見する動きが本吉郡入谷にて始まると（次号にて紹介）、連続した山地の反対斜面にある登米北沢あたりでも「これならオライ（自分）の山にもある」と、日根牛地区でも採掘（通称「ヤマ」）が始まった。これが明治35（1902）年頃という。試行錯誤を重ね、明治44（1911）年には、入谷の指導者を招いて本格化した。その後大正にかけて、徐々に協同や会社化も起こったが、商品になる岩体に当たるとは限らない「ヤマ」の経営は、不安定だったようだ。

昭和7（1932）年には坑道掘りが始まり[写真4]、以前よりは安定生産にこぎつけ、同13（1938）年頃には地元によるスレート工業組合が結成された。これに着目した域外の人々もいて、同18（1943）年頃には神戸の松竜商会（まつりゅう）が地元業者を買収し、松竜天然スレート（株）を立ち上げた。戦後は地元も奮起し、昭和24（1949）年に登米スレート工業協同組合を設立。そこへ、上述した昭和27年の東京駅屋根改修工事が舞い込み、ドーム部約600坪が登米産で葺かれ、業界としてのピークを迎える。さらなる安定供給をめざそうと、登米・松竜が手を組み、創始から数十年経った昭和34（1959）年、ようやく東北天然スレート工業（株）が設立される[写真5]。

一方、屋根葺き「施工」にあたった人々の手がかりとして、高橋哲郎さんは、明治45（1912）年、登米（とよま）病院に増築された洋館風スレート葺き（雄勝産）の外科診療棟を例示する[写真6]。瀟洒（しょうしゃ）な外観は町のランドマークだったというが、時代は下り、昭和51（1976）年に高橋哲郎さんは、解体工事に参加したとき、「明治四十五年葺之 庄司幸治 加賀正」の墨書を見た。

庄司幸治（石巻蛇田出身、？–1936）は、スレート葺きの祖・篠崎源次郎（第1回にて紹介）の弟子筋と伝わり、当地方における屋根葺き職の草分けで、その義弟が高橋勉治、すなわち高橋哲郎さんの直接の師にあたる。庄司幸治につながる戦前の職人の名を、高橋哲郎さんは同著にて30人ほど挙げている。その一人、岩手県川崎村の千葉源五郎は、屋上制限令（明治14年東京、大正7年仙台）に目をつけ、鉄路沿いの茅葺家にスレートを勧めて廻ったという。

東京駅屋根改修ののち、全国のスレート需要は下降線をたどったものの、グランドプリンスホテル高輪貴賓館・旧竹田宮邸（たけだのみや）（設計…片山東熊 1911、写真7）の屋根修復や、千葉県立美術館（設計…大高建築設計事務所 1974）など、実績は重ねられていく。こうした屋根工事を請負ったのが「東北天然スレート『工事』（所在地…東京）」であった。

つまり、硯に始まった雄勝に対して、登米は、開発当初から建築用スレートに特化し、採掘から加工までの「材」と、屋根葺き「工」の双方を供給してきたこと、その中心時代は昭和期であったことが特徴といえる。産業遺産ともいうべき登米町日根牛北沢のヤマ跡には、こうした物語が積み重なっている[写真8、文献5]。

都市部のスレート需要がつくる材・工・営の共同

こうした中央・全国における天然スレートの採用には、手引きをした人々の存在がうかがわれる。すなわち「材」「工」に対し、受発注や経営管理を担う「営」の関係者である。スレート葺きの祖・篠崎源次郎が渡独から帰国した明治22（1889）年、堀江小十郎らが篠崎

[県・市町村・村落] 宮城県登米市登米町日根牛
[用途] 主屋・長屋門等
[形態] 入母屋・切妻
[葺き方] 魚鱗
[棟] 箱棟亀甲スレート等
[破風] 一段菱スレート等
[産地ほか] 登米産

[県・市町村・村落] 宮城県仙台市作並鎌倉
[用途] 倉庫・作業屋
[形態] 切妻
[葺方] 魚鱗
[棟] 箱棟スレート
[破風] 錣（しころ）文様
[産地ほか] 登米産（とみられる）

[県・市町村・村落] 岩手県遠野市青笹
[用途] 作業屋
[形態] 切妻
[葺き方] 魚鱗
[棟] スレート
[破風] 末広重ね+錣（しころ）
[産地ほか] 登米産

写真9（左）、10（中央）、11（右） 登米産スレートが葺かれているとみられる陸前地方各地の民家建築例

の「工」に依拠して設立した「合資会社スレート商会（銀座）」は、その最初期の例とも考えられるが、明治15（1882）年創業「天然スレート株式会社」なる別の広告資料も存在し、嚆矢（こうし）はいずれか定かでない。洋風建築の発生地である東京や大阪にスレート産業胎動の一極があったのは当然であろう。

なかでも中西商店（東京、現存せず）は、明治前期からの老舗で、しばしば大規模な建築工事の屋根工事部門を受注し、経済成長期には東北天然スレート工業／工事の両社に材・工の実務を委託したようである。こうした相補的体制の一端を知る野口辰二さん（1928生まれ・元屋根板金業）は、「中西さんの番頭さんは面倒見がよかったし、東北の職人さんたちは元気だろうか」と目を細める［註7］。

昭和後期から平成にかけては、全国の富裕層向け建材にもなった。筆者は以前、大阪のとある旧家を視察していて、スレート屋根だったことからご婦人に産地を訪ねたところ「トヤマ、いうてたけどな」と返答頂いた。そう、トヨマと聞いて産地「登米」が浮かぶ人は限られる。富山と聞き違えたのであろう。他に、ゴルフ場の高級クラブハウスなどにも用いられたが、それも長くは続かなかったようだ。

昭和の民家に普及した登米スレート

第1回では、東京駅（1914年）を境に、近代を「前期」「後期」に分けた。欧米に追いつけ、追い越せという前期に対し、後期は、分離派などのデザイン運動、帝冠様式と呼ばれるナショナリズム、そして国際様式と呼ばれる普遍的合理性の模索へと、日本の建築様式が多様に舵を切った時期にあたる。こうなると、欧化の切り札・天然スレートにとっては追い風ではない。登米における大正昭和の試行錯誤は、やや遅かったのかもしれない。

それでも戦前は、台湾や朝鮮半島に進出した洋風の日本建築が建てられたし、上述の「屋上制限令」に関連して、石屋根に葺き替え、また建て替える地元の旧家も散見されるようになっていた。戦後になると、農地解放や耕地整理により家屋を新築する人々も徐々に増え、スレートが身近にあった地域ではしばしば採用されたようである。資材不足のなかで編み出された新たな規格サイズ（「五八（5寸×8寸）」など）が一般化したと伝わるが、筆者らはむしろこれを目にすることが多いくらいである。もともと瓦葺きが少なく、茅葺きが支配的だった当地方では、屋根を不燃化しようとする政策もあいまって普及を手伝った［文献6］。時期によっては、スレートがセメント瓦より安い時期もあったと話す古老もいる。

こうしてじわじわと広がり、この地方にはいまも2,000棟以上のスレート民家が現存する。住宅主屋のみならず、当地方に多い長屋門［写真9］、はなれや倉庫・作業屋［写真10］、土蔵、板倉、風呂・便所といった小さな付属屋に至るまで、スレートが葺かれている。主屋は建て替えられることも多く、付属屋のみに残る家も多い。こうした景観を筆者らは「スレート屋根の生活景」などと呼ぶ。地域ごとの微妙な個性を、スレート屋根が優しく包みこんでいる家並み風景に魅力を感じるからである。

分布域は、登米市内はもちろん、前号で挙げた石巻・女川地方を除くと、沿岸部では東隣の南三陸町、北隣の気仙沼市、岩手県に入って陸前高田市、大船渡市、釜石市に至る。内陸部では、西隣の大崎市や栗原市など、北上川・鳴瀬川流域をはじめ、岩手県南の一関市や奥州市、そして遠野市でも確認された（写真11、第1回で紹介した国選定石盤葺技能者・佐々木信平さんの師匠が葺いた昭和35（1960）年頃の仕事と判明）。

このように、登米産がとにかく広がっている。良質のスレートを産した矢作地区（岩手県陸前高田市）ですら、地元産だけでなく登米産が広域に普及したというし、雄勝ですら、登米産とみられる屋根が時折みられた。登米スレートは色味が比較的均一に黒く、鱗の半円が滑らかに加工されており、小規格材が少なくなく、古い時代の雄勝産とは比較的区別しやすい（もちろん判別不能なことも多く、多くは聞取りによる）。

近代前期の洋風建築を支えた雄勝に対し、近代後期における修

復工事と民間・地域普及において主力を担った登米。その歩みは、10数年の前史を経て（≒1900–1920）、戦後にかけての30年にわたり、開発・生産・共同を積み重ねる登り坂の苦労があった（≒1920–1950）。そして、ようやく迎えた頂点は、またしても東京駅の屋根改修であった。その後は下降線であったが、経済成長期にかけて文化財修復や民間建築に用いられ、1994（平成6）年に採掘を停止した。こうした中央の建築文化の舞台裏で、陸前地方の農山漁村ではじわじわと普及がすすみ、身近な材料が用いられた「昭和の民家が」育まれてきたのである。

雄勝・登米の2大産地は、陸前スレート建築史において互いに欠くことのできない存在である。そして、この2地域に加えるべき産地・普及拠点（入谷・矢作）がある。これは次号で紹介したい。

註1　水澤は、現在の岩手県奥州市水沢区を指す。さらに北隣の胆沢郡金ケ崎町までが仙台藩であったため、当初の廃藩置県では岩手県南から登米を含む宮城県北までが一関縣、水澤縣などと区分された。スレートの普及はずっと後時代のものであるにも関わらず、その分布域が明治初期の県域とも重なり合うようにみえるのは、民家形式に一定の類似性が基層にあるとも考えられ、興味深い

註2　仙台藩は、既存の豪族を従えながら広く未開な領地を新田開発するため、米を俸給とする俸禄制ではなく、武士に土地を与えて開発を奨励する「地方知行制（じかたちぎょうせい）」を採用していた。北隣の盛岡藩や大河北上川からの侵略に備えるだけでなく、内部反乱にも備える必要があり、軍事拠点を21箇所も配置した。なかでも登米要害は重要視され、伊達一門（もっとも家格が高いグループで、これに一家・準一家・一族……などが続いた）が治めた場所である

註3　擬洋風建築とは一般に、工部大学校造家学科（現在の東京大学建築学科）等において西洋建築を体得した設計者が出現するまでのあいだ、在野の大工らが見よう見まねで西洋風に建てた建築群を指す。山添も元は大工であり、その点では擬洋風建築とくくることもできるが、ウィーンやロンドンで見聞してきたという意味では、他の擬洋風建築と区別すべき、という見方があることを付記しておきたい

註4　東北工業大学中村琢巳研究室にて研究中。たとえば以下を参照
https://mykoho.jp/article/宮城県登米市/広報とめ–7月号（278号）/特集–明治150年–このまちを未来へ継承するために2/

註5　建築本体の実際の改修履歴はもっと細かいが、ここでは屋根に着目して概説。当初から昭和27（1952）年の屋根改修までを第1世代、昭和48（1973）年の屋根改修までを第2世代、平成大改修までを第3世代、現状を第4世代とした。たとえば以下を参照
https://www.tokyoinfo.com/access/history/timeline.html

註6　佐々木英俊氏（登米市）のご協力により撮影

註7　科学技術振興機構社会技術研究開発センター多世代共創領域「農山漁村共同アトリエ群による産業の再構築と多彩な生活景の醸成（研究代表者…大沼正寛）」2016–2019における共同調査研究にて2017年5月に調査

註8　写真9〜11は東北工業大学大沼研究室2012–2015にて限定制作「陸前地方の天然スレート建築に関する研究・広域調査マップ」より部分抜粋した

参考文献

1. 小林清治編『仙台城と仙台領の城・要害』日本城郭史研究叢書第二巻（名著出版、1982年4月）
2. 伊藤邦明・舛岡和夫編『旧仙台藩要害 金ケ崎 —— 城内・諏訪小路地区 —— 伝統的建造物群保存対策調査報告書』（金ケ崎町教育委員会、1997年3月）
3. 財・文化財建造物保存技術協会編『重要文化財 旧登米高等尋常小学校校舎保存修理工事報告書』（登米町、1990年1月）
4. 高橋哲郎『登米スレートの採掘と施工』（自費出版、2003年11月）
5. 佐藤豪・大沼・阿部ほか『登米市登米町日根牛北沢におけるスレート開発略史と残材利用のための山林の概況把握』（日本建築学会東北支部研究報告集 計画系（80）、pp71–74、2017年6月）
6. 佐藤洋一郎監修，原田信男・鞍田崇編『焼畑の環境学：いま焼畑とは（地球研ライブラリー）』（思文閣出版、2011年9月）より大沼正寛「茅葺き民家を支えるヨシ原の火入れ」に記載

写真…大沼正寛+東北工業大学大沼研究室

おおぬま・まさひろ

1972年生まれ。東北大学大学院修了、博士（工学）。一級建築士。那須建設、伊藤邦明都市建築研究所、東北文化学園大学助手・准教授、東北工業大学准教授を経て2016年より同教授・デザイン工学専攻長。専門は建築設計・地域計画・建築歴史地理

あべ・ただし

1970年生まれ。（株）建築モード研究所、岩井紘子建築設計事務所を経て、2001年ノーマルデザインアソシエイツ主宰。2018年兼東北工業大学大学院ライフデザイン学研究科デザイン工学専攻（大沼研究室）在籍

自習型認定研修の設問

設問1

登米産の天然スレートが用いられていないと考えられる建物・年代の組合せはどれか。

a. 明治19（1886）年の北海道庁

b. 昭和27（1952）年に改修された東京駅のドーム屋根

c. 昭和49（1974）年に建築された千葉県立美術館

設問2

登米のスレート生産と地元民家への普及に関する記述のうち、間違っているものはどれか。

a. 登米スレートは、洋風建築の需要や雄勝の隆盛ののち開発が本格化したため、結果として周辺民家にも広まった。

b. 登米スレートは、昭和に入り、坑道堀による採掘が進められた。

c. 登米スレートは戦後、全国的に普及したが、それは中央業者と共同せず、独力で販路を開拓したことによる。

認定教材の設問への回答は、CPD情報システムのページ
https://jaeic-cpd.jp/
にアクセスのうえ、お願い致します。

※不正解の場合は、単位に登録できない場合があります。
※自習型教材の選択欄における会誌『建築士』選択項目は、平成28年1月より建築士会会員のみの表示項目になります。